

ロシアとウクライナ、ふたつの国のこの 30 年

第 1 回 誰にウクライナが救えるか

2024 年 11 月 6 日

エコノミスト 西谷公明

問題意識

古きをたずね求めて、今を照らす。ロシア・ウクライナ戦争を、2022 年 2 月 24 日のロシアによるウクライナ侵攻を起点に説き起こすのではなく、ロシアを宗主国とする「ウクライナ独立戦争」という歴史的な脈のなかで考えたい。

1. 平穏なる独立（拙著『ウクライナ通貨誕生』参照）

（1）なぜ平穏に成就されたか

- ・ソ連崩壊（モスクワにおけるソ連とロシアのあいだの権力闘争）によって独立
- ・8 月クーデター後、ウクライナ共産党の民族独立派への合流（寝返り？）
 - ➔「独立宣言」採択（91.8.24）、出席 400 人中 346 人（86.5%）が賛成
 - ➔独立の是非を問う国民投票（91.12.1）、90.3%が賛成
- ・共産党出身クラフチュク氏の大統領選出（91.12.1）
 - ➔クラフチュク氏（最高会議議長、穏健独立派 61.6%）
vs チョルノヴィル氏（西ウクライナ・リヴィウ州議会議長、急進的民族独立派 23.3%）
 - ➔国民は安定を選択、国家としての脆さの裏返し（民族的な一体性を欠く）

（2）ウクライナという国

- ・ソ連のなかでロシアに次ぐ第二の行政単位
 - ➔面積約 60 万平方キロ（日本の 1.6 倍以上）
人口約 5200 万（ソ連の人口 2 億 8700 万の約 18%）
- ・東/南部の鉱工業地帯 vs 中/西部の農業地帯
 - ➔石炭と鉄鋼、穀物の国（ソ連の鉄鉱石の 45%、鉄鋼の 35%、農業の 23%を生産）
- ・東/南部を中心に 1100 万のロシア系住民が住む（全人口の 22%。33%はロシア語が第一言語）
 - ➔200 年以上もの長い間、ロシア/ソ連のもとでロシア語を共通言語としてひとつの社会を形成

(3) 国造りはいかに為されたか

- ・「独立宣言」は、将来の中立政策とともに、ウクライナ通貨の発行とウクライナ軍の創設を謳う
 - ➡ロシアは激しく反発、領土問題を喚起（現下の戦争へいたる確執の原点）
- ・民族独立派の主導とその弱点
 - 「維新」にして「維新」にあらず（旧い行政管理機構に頼らざるを得なかった）
 - 国造りは実務なり（首相を筆頭に旧共産党官僚が行政を握る）
 - ➡東部産業利権のウクライナ化（後年の汚職の構造）
 - ➡遅々として進まない改革（貧しさの定着と腐敗の蔓延）

2. 「不寛容」の伝説（ウクライナ略年表参照）

(1) 過ぎし時代の記憶

- ・キエフルーシ=キーウを都とする「ルーシ」の公国、ギリシャ正教の導入（988）
- ・モンゴル襲来（1240）、モスクワ公国（1326）～モスクワ大公国/ロシア帝国
- ・コサック国家（15C）とポーランド支配、ポーランド分割（18C 後半）とロシア帝国支配

(2) ガリツィア、非ロシアの歴史

- ・独ソ不可侵条約（1939）の密約によってソ連に占領（1941）
（バルト3国、ポーランドなどと共通の歴史の記憶で結ばれる）
- ・ユニエイト=ウクライナ・カトリック（東方典礼を守りつつ、教理はカトリック）
 - ：ポーランド支配下で、正教会がローマ・カトリックと合同（プレストの合同、16C末）
 - ➡ロシア/ソ連のもとで禁止。ウクライナ民族主義の精神的支柱となる（18C後半）
- ・ガリツィア（オーストリア領）において、ウクライナ人を統合する反ロシアの民族教会と化す
- ・ソ連崩壊末期、ガリツィアの中心都市リヴィウを拠点として人民戦線「ルーフ」を結成
 - ➡ロシアからの離脱、独立を主導

(3) マイダン政変（「誰にウクライナが救えるか」『世界』2014年5月号寄稿参照）

- ・10年毎に革命が起きる国
 - ➡ヤジロベいの如く：
1994年東へ、2004年西へ（オレンジ革命）。いったん東へ戻るも、2014年再び西へ
- ・行政の汚職と社会の腐敗
- ・ロシアによるクリミア併合、ドンバス紛争へ
- ・国民はロシアに背を向けて、ヨーロッパの方を向く

以上

ロシアとウクライナ、ふたつの国のこの 30 年

第 2 回 ロシア、ユーラシア国家の命運

2024 年 11 月 13 日

エコノミスト 西谷公明

前回のおさらい

1. 北方のフロンティア国家

(1) プーチンがロシア国民の心をつかんだ日

「苦しく、長きにわたる、疲れ切った航海の末に、

クリミアとセヴァストポリが祖国の港へ帰って来た。祖国の港、ロシアへの永遠の帰還だ」

(赤の広場におけるプーチン大統領演説から、2014.3.18)

・プーチン支持率：60%→90%へ急上昇 (独立系レヴァダセンター調べ)

(2) ロシア領土の特殊性

・近代ロシアはモンゴルの殻を破って現れる (モスクワ大公国、イワン三世、1480)

→16 世紀以降 (ロシア帝国、イワン四世)、陸上を南へ、東へと領土を拡大

・広大なる境域国家：本国と植民地が陸続きで広がる

→拡大した領土の長い外縁部：獲得した本土を守るための緩衝地帯

(3) ウクライナ領土とロシア支配の歴史

・ソ連崩壊と国境線の画定

民族自決 or 旧国家の行政上の境界線

ソ連体制下の行政上の境界を独立後の国境とすることで合意 (1990.11)

(ただし、当時のロシアはウクライナの完全独立を想定しておらず)

・ロシア史におけるクリミア

クリミア戦争 (1853-56)、ベレヤスラフ協定締結 300 周年 (1954)、ソ連崩壊 (1991)

→ロシアはクリミアを手放さない

2. 石油とロシア

(1) オイルロケット

- ・2000年代、資源大国ロシアの復活。日本企業のロシア進出が相次ぐ
- ・ロシア経済は原油価格と軌を一にする
 - ➡トヨタの販売 26000台(2003) →205000台(2008)

(2) プーチンのロシア（経済面からみると）

- ・資源輸出レント（利潤）に依拠した統治
- ・資源大国の実像
 - 財政基盤：歳入の約40%は原油・ガス関連
 - 経済活動：産業の50–70%は公的セクター（中小企業が少ない）
 - 就業構造：国民の多くは公務員、国営企業社員、団体職員
- ・マトリョーシカ人形は何を語るか

3. ロシア経済、崩れない理由

(1) 戦争特需

- ・上方修正を重ねた IMF 経済見通し
 - 2024年1月時点 2.6%、4月 3.2%、7月 3.2%、10月改訂時 3.6%
 - (米国 2.8%、ユーロ圏 0.8%、日本 0.3%、英国 1.1%)

(2) 強さの背景

- ・制裁にもかかわらず、世界経済とつながる
 - ➡並行輸入の定着
- ・財政規律：財政赤字の対GDP比 2-3%水準、経常収支も黒字を維持
 - 政府債務残高（累積）の対GDP比率は15%（BIS統計）
 - ➡経済の余力を残す
- ・OPECプラスの枠組み(2016.12合意)
 - ➡供給量に対する影響力を確保
- ・下げ止まる原油価格、協調減産（2022.7から継続）

(3) 中国の支え（「日ロオンライン会見抄録」を参照）

以上

ロシアとウクライナ、ふたつの国のこの 30 年

第 3 回 歴史は 4 度繰り返すか

2024 年 11 月 20 日

エコノミスト 西谷公明

1. 対ロシア独立戦争（ウクライナ略年表参照）

- ・北方戦争（1700-21）：
 - ロシア・スウェーデン戦争時、スウェーデンと連合して独立を図る。ポルタヴァの戦い（1709）
- ・ロシア革命：
 - ーキーウにコサックの遺志を継ぐ「ウクライナ国民共和国」の創設を宣言（1917）。
 - 第一次世界大戦後の混乱のなかで、ポリシェビキ軍に敗北。
 - ー他方、西のガリツィアでもウクライナ民族主義者が中心となり、「西ウクライナ国民共和国」の樹立を宣言するも（1918）、最終的にポーランドに併合。
- ・第二次世界大戦：
 - 西ウクライナでウクライナ蜂起軍（UPA）が結成。
 - 対ドイツ、対ソ連のガルチザン戦争をおこなうも、ソ連軍によって鎮圧（1950 年代半ば）

➡ ロシアが関わる大戦を機に独立戦争を戦う。

2. 独立後 30 年を振り返る

（1）ロシア

- ・変わったこと
 - ➡ 経済復活・大国化、軍事国家化、中国経済への依存・・・
- ・変わらないこと
 - ➡ 専制・中央集権国家としての歴史、原油依存、社会の未成熟さ・・・

（2）ウクライナ

- ・変わったこと
 - ➡ ロシア敵視、親欧米、ウクライナ化（民族意識の高まり）
 - ➡ 国民の政治意識がひとつにまとまる（アイデンティティの形成）
 - （ソ連崩壊後、はじめて独立の命運を賭けて宗主国ロシアと戦う）

・変わらないこと

➡ 経済低迷、財政赤字、汚職と腐敗、依然として「はざまの国」であること

* 参考：クチマ政権（1994-2004）とゼレンスキー政権（2019-現在）の比較

➡ 戦争は政治の延長でもある

3. 停戦への模索、まとめ

(1) どのように終わるか－時間軸

・まもなく冬が来る

➡ 1-2月は、事実上の「氷結」状態

・トランプ新政権発足（2024年1月20日）

－ウクライナ支援の見直し（ウクライナ支援＝バイデン・マター）

－バイデン政権の置き土産（ロシアの一方的な勝利に終わらせないため）

・ウクライナ大統領選挙（2024年5月？）

(2) 「凍結」される戦争－停戦のかたち

・事実上 NATO の保護下（ただし加盟にあらず、ロシアの攻撃を抑止するため）

・EU 加盟をゴールとして設定（ウクライナ国内の混乱を防ぐため）

・停戦、領土は画定せず（和平にあらず）

➡ 「独立を賭けた戦い」から「復興への希望」へ

【参考文献】（刊行順）

・司馬遼太郎著『ロシアについて－北方の原形』（文春文庫）、『草原の記』（新潮文庫）

・中井和夫著『ウクライナ・ナショナリズム－独立の 딜레マ』（東京大学出版会）

・黒川祐次著『物語 ウクライナの歴史－ヨーロッパ最後の大国』（中公新書）

・ドミニク・リーベン著『帝国の興亡』（上・下）（日本経済新聞社）

・松里公孝著『ウクライナ動乱－ソ連解体から露ウ戦争まで』（ちくま新書）

以下、西谷著

・『通貨誕生－ウクライナ 独立を賭けた闘い』（都市出版）

・『ユーラシア・ダイナミズム－大陸の胎動を読み解く地政学』（ミネルヴァ書房）

・『ロシアトヨタ戦記』（中央公論新社）

以上